SiBUC Mannual 利用編 ver1.0 — Part1: モデル入力データの作成と陸面過程解析の方法—

SiBUC Manual Analyzer's Edition ver1.0

-How to Generate Land Surface Data Sets and Simulate using SiBUC-

小槻峻司⁽¹⁾・峠嘉哉⁽¹⁾・萬和明⁽¹⁾・相馬一義⁽²⁾・甲山治⁽³⁾・田中賢治

Shunji KOTSUKI⁽¹⁾, Yoshiya TOUGE⁽¹⁾, Kazuaki YOROZU⁽¹⁾, Kazuyoshi SOUMA⁽²⁾, Osamu KOZAN⁽³⁾ and Kenji TANAKA

(1)京都大学大学院 工学研究科
 (2)山梨大学大学院 医学工学総合研究部
 (3)京都大学 東南アジア研究所

(1) Graduate School of Engineering, Kyoto University

(2) Interdisciplinary Graduate School of Medicine and Engineering, University of Yamanashi

(3) Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Synopsis

This document describes the way to generate land surface parameters and simulate using SiBUC. The document provides the information about model intercomparison projects which SiBUC participated, and about previous studies using SiBUC. The document guides users to understand the original data, the flows to process those original data, the flows to run the SiBUC, and the way to process the output from SiBUC. The document also guides the users to understand the way to visualize the generated land surface data and processed output data from SiBUC simulations.

キーワード: SiBUC, 陸面過程モデル, ユーザーマニュアル, 作画 **Keywords:** SiBUC, land surface model, user manual, visualization

1. 序論

近年,人口増加に伴って世界の食糧需要量は大き く増加している.灌漑農地は,多量な水を消費する デメリットを有する一方で食糧生産性に優れる.世 界では総農地面積の約2割の灌漑農地から,約4割の 食糧が生産されている.2050年には90億人にも達す ると予測される人口を養う上では,灌漑農地におけ る農業水需要量を把握すること,また供給量として の水資源量を把握することが重要である.水資源量 を把握する観点からは,地表面に於いて降水量に対 する蒸発・流出のバランスを解く必要がある.

一方で、地表面の水・熱収支は、地球上の水・熱 循環にとっても重要な役割を持つ.例えば、水循環 の視点から見た地表面の蒸発散は、地表に到達した 降水が水蒸気となって大気へ戻る過程であり、表層 土壌を乾燥させて土壌層の浸透能を回復させ、降雨 流出の形態を変化させる.熱循環の視点から見た蒸 発散は、地表面で得た気化熱を大気へ輸送する過程 であり、地表面が太陽から得た熱エネルギーを再分 配させる働きがある.

その様な背景の元,陸面過程モデル(Land surface



Fig 1. Schematic image of land surface process. Energy, radiation, and water budgets are calculated in the process.

model: LSM)は、陸域水循環モデルや大気水循環モデ ルの地表面境界を解くモデルとして開発されてきた. 陸面過程モデルは、非常におおざっぱな言い方をす れば、大気側からの気象強制力を条件に、地表面の 放射収支・水収支・熱収支を解くモデルである(Fig.1). 気象強制力には、降水・気温・短波放射・長波放射・ 比湿・大気圧・風速が用いられる(モデルによって は、地表面アルベドや射出率を入力とすることもあ る).

京都大学防災研究所・水資源環境センターを中心 とした研究チームにより,陸面過程モデル SiBUC(Simple Biosphere model including Urban Canopy; Tanaka, 2004)が開発されてきた.SiBUCは地 表面状態を緑地・都市・水体の3つのカテゴリーに分 類し,各グリッドにそれらの混在を認めるモザイク スキームを採用したモデルである(Fig.2).

1.1 本資料の目的

本資料では、SiBUCを利用する為の方法について

Fig 2. Schematic image of the SiBUC, which uses mosaic scheme. Each grid is divided into three land cover categories (water body, green area, and urban area).

解説する.具体的には、計算に要する地表面パラメ ータや気象強制力の作成方法、入力データを用いた SiBUCの解析方法、SiBUC出力の代表的な処理方法 を説明する.また、入力データや出力データの作画 方法についても説明する.SiBUCの詳しいモデルの 説明や支配方程式の記述については、Tanaka(2004) を参照されたい.論文については、以下より取得可 能である.(http://rwes.dpri.kyoto-u.ac.jp/~tanaka/sibuc/ sibuc-web.pdf)

本資料の目的は、マニュアルを公開の上、読者に 興味を持って頂き、SiBUCユーザーの拡大につなげ ることである.加えて、本資料ではSiBUCの解析出 力についても説明を加えており、その出力を使うと いった研究協力にも発展できればと考えている.

1.2 読者への注意とお願い

まず注意点である.これまで開発者らは,注意深 くソースコードを開発してきたが,SiBUCには依然

		1 1 5 7		
Name of the projects	Year	Target area	Processes	Related papers
Lake Biwa	1994	The Lake Biwa Basin (sites)	Paddy field	田中ら(2000)
RhoneAGG	2001	AlpsImpacts of spatial(basin)resolution of LSM		Boone et al. (2004)
GSWP2	2003	Global soil wetness (sites)	Soil moisture	萬ら(2006)
SnowMIP2	2008	Hitsujigaoka, Hyytiala, Alptal, Bearms, Fraser (sites)	Snow melt and assimilation	Rutter et al. (2009)
ADMIP	2010-	West China and Mongolia (sites)	Asian dryland	萬ら(2011)
ALMIP2	2012-	The Niger River Basin (sites and basin)	African Monsoon (Arid and semi-arid)	To be published

Table 1. The MIPs (model intercomparison projects) which SiBUC have participated.

Applied	Cou	pled M	odel		Di	scussed	phenor	nena or	proces	ses		Reference
Area	Atm	Riv	Crp	DA	HI	Frc	SM	ET	Rof	IRR	CC	
Talana	0				0							Souma et al. (2013)
токуо, тр	0				0		0					相馬ら (2013)
JF	0				0		0					藤井ら(2011)
Niigata, JP			0				0	0				萬ら(2010)
	0							0				相馬ら(2004)
Lake Biwa,						0	0	0	0	0		田中ら(2001a)
JP						0		0				Tanaka et al. (2003)
						0		0	0	0		Tanaka et al. (2001)
Central Japan					0	0	0	0				相馬ら(2006)
Б. (¹	0				0	0	0	0				Souma et al. (2008)
Entire		0	0			0			0	0		小槻ら(2013b, c)
Japan		0	0			0			0	0	0	Kotsuki et al. (2013b)
C . the set		0							0	0		小槻ら(2011)
Southeast						0	0	0	0			Kotsuki et al. (2013c)
Asia						0		0	0			Kotsuki et al. (2013a)
Asian Dryland				0			0	0				萬ら(2011)
Huaihe							0		0	0		甲山ら(2004)
River	0					0						田中ら(1998)
(China)				0			0					田中ら(2001b)
Turkey						0		0	0	0	0	Tanaka et al. (2006)
Aral Sea						0	0	0	0	0		峠ら
												(2011, 2012, 2013)
Nile River		0				0		0	0			浅野(2013)
		0				0		0	0	0	0	安倍ら(2012)
Niger Riv.		0				0	0	0	0			To be published
Tibetan Plateau / Siberia							0	0				渡辺ら(2003)
						0	0	0		0		萬ら(2006, 2009)
Global		0				0			0	0		小槻ら(2012)
						0		0		0		小槻ら(2013a, d)

Table 2	Previous	studies	using	SIBLIC	and their	counled	1 models	discussed	nhenomenon (r nrocesses	and references
1able 2.	rievious	studies	using	SIDUC	and then	coupled	i moueis,	uiscusseu	phenomenon (n processes.	and references.

Atm: Atmospheric models, Riv: River routing models, Crp: Crop growth models

DA: Data assimilation, HI: Heat islands and heavy rainfall, Frc: Meteorological forcing for LSM, SM: Soil moisture, ET: Evapotranspiration, Rof: Runoff (river discharge, water resources), IRR: Irrigation, CC: Climate change

としてバグがある可能性がある.また,開発者らは SiBUCの性能向上に努力してきたが,まだSiBUCの 計算結果は現実と大きく異なるかもしれない.これ らがもたらす読者の不利益に対し,開発者は一切の 責任を負わない.あくまでも利用者の責任でSiBUC を利用して戴きたい.

次にお願いである.この資料については,開発者 らの手により作成された.可能な限り分かり易く記 述したつもりであるが,SiBUCを初めて扱う読者に は難解な記述もあるかもしれない.その場合は,難 解であった場所を,開発者らに伝えて欲しい.加え て,SiBUCは改良・拡張の余地を無限に残している. もし,あなたがSiBUCの改良・拡張に成功し,その 成果をSiBUCのユーザーに還元する事を望むならば, 是非開発者らに連絡して頂きたい.双方の権利につ いてよく相談した後,その成果をSiBUCの改良版に 反映すべく,出来る限りの努力をする.



Fig. 3. The structure of this document. Chapter 2 describes the way to generate land surface data sets. Chapter 3 describes the way to run the SiBUC. Chapter 4 describes the way to process output data from SiBUC.

1.3 関連する研究と文献

SiBUCについての引用は,以下の様にして欲しい. Tanaka K. 2004. Development of the New Land Surface Scheme SiBUC Commonly Applicable to Basin Water Management and Numerical Weather Prediction Model. Doctoral Dissertation, Graduate School of Engineering, Kyoto University: Kyoto; 289.

なお、本資料で解説するSiBUCの計算を実行する には、多数の入力データが必要である.データを利 用して研究を行った際は、データの提供者・開発者 への謝意も含めて一つ一つ丁寧に引用して欲しい. 本資料中でも、引用すべき文献について明記する.

開発者らはこれまで、複数の陸面過程モデル相互

比較 プロジェクト (MIPs: model intercomparison projects)に参加し,動作確認や改良・拡張を行ってき た.入力・検証データの揃ったMIPs適用地域で一定 の動作確認を経ている.これまでに参加したMIPsに ついては, Table 1にまとめた.

加えて、SiBUCはこれまで、アラル海流域・日本・ ナイル川等の流域を対象とした研究から全球を対象 とした研究まで、様々な応用研究が計られてきた. それら既往研究の概要と文献については、Table 2に まとめた.

1.4 必要な計算機環境と知識

SiBUCの解説,及び,入力データの作成は、シェ

Table 3. The overall structure of directories to use SiBUC on a certain (path)/ directory. The structure in this table assumes to use SiBUC on the entire African Continent at spatial resolution of 1.0 degree. The users can change names of directories with blue color depending on the resolution, the target area, the version, and their preferences.

Directories on \$(path)/		Purpose	Chapter
Data/	data/	To connect link to global data sets	2
	Africa_1deg	To generate land surface and meteorological data sets	2
SiBUC_Africa1deg_v1.01/	input/	Input parameters (no need to change, basically)	-
	lib/	Library programs codes of land surface processes	3
	restart/	Initial files for restarting simulation	-
	src/	Source programs of SiBUC	3
	output/	Output files of SiBUC	4

ルスクリプトとFortranソースコードより構成されて いる.そのため、SiBUCを利用する際には、以下の2 つの条件が必要である.

- シェルスクリプト、及び、"make"コマンドを使 える環境である事.UNIX,LiNUX,MacOSが稼働 する計算機環境を想定している.ただし、 WINDOWS環境下での解析実績もあるため、 WINDOW環境下での使用を望む利用者は、開発 者らへ相談して頂きたい.
- [2] Fortranコンパイラが使用可能であること.これまで、Intelのコンパイラ環境下で開発・解析されてきたため、Intelコンパイラ環境が理想的である. また、フリーソフトウェアであるgfortran環境下でも解析可能な様に、動作環境を確認中である. 加えて、以下の環境・知識を有していることが望ましい.なお、これらの知識が無くとも解析を実行させることは可能であるため、実際に処理を行いつ
- つ知識・技術を習得していく事も可能である.
- [1] SiBUC出力,及び,入力データを確認する為,フ リーソフトウェアGrads (Grid Analysis and Display System)のスクリプトを準備した.本資料中の地 図ファイルは,全てGradsにより作成されている. ただし,Gradsによる作画はSiBUCを解析する上 で必ず必要な訳ではない.
- [2] 基本的に、入出力ファイルはバイナリで記述される.アスキーファイルではなく、バイナリファイルを用いる理由は、多量なデータを扱う為、データ容量を抑えるためである.

1.5 本資料の構成

本資料の構成はFig.3に示す通りである.入力デー タの作成・SiBUCのソースコード・outputの処理プロ グラムは、同じ領域定義ファイル("define.in")を読み 込むことで、基本的にソースコードに手を入れる事 無く解析可能である.つまり、領域定義ファイルを 最初に決定することで、容易にSiBUCの解析・output 処理まで行うことが出来る.実際の作業で必要にな るのは、最小限のインクルードファイルの修正(主 に、"define.in"へのpath修正)とスクリプトの実行の みである.また、元データには全球データを利用す るため、世界のどの地域に於いても解析を実行する ことが出来る.これにより、データ処理の時間を除 けば、実際の作業時間にして30分以内に、いずれの 領域に於いてもSiBUCを用いて解析することが可能 になった.勿論、ここで示す方法は基本的な解析方 法である.モデルの修正や入力データを作成する際 には、ソースコードの修正が必要になる.

第2章では、領域を決定した後に("define.in"),全球 の地表面・気象強制力データから領域のデータを切 り出すプロセスを説明する.

第3章では、切り出した陸面データを使用して、 SiBUCによる解析を実行するプロセスを説明する.

第4章では,解析で出力されたoutputファイルの処 理方法について説明する.

それぞれのプロセスではGradsを用いた作画方法 についても説明する. Gradsでバイナリファイルを読 み込むために必要なコントロールファイルについて は、実行するソースコード中で自動作成されるため、 ユーザーが自ら作成する必要はない. スクリプトフ ァイルについても基本的に準備してあるが、領域や 作画範囲については対象毎に異なるため、それらを 定義するスクリプトを修正する必要がある(2.5節に 詳しく述べる).

1.6 全体のディレクトリ構造

本資料で解説するディレクトリの全体構造は, Table 3に示す通りである.以降,本資料では具体的 に,新たにアフリカ全領域を対象にSiBUCを実行す る事を想定して解説を進める.なお,本資料では以 後で説明するプログラム群のうち,入力データの作 成アルゴリズムをv1.1として,SiBUCの実行及び output処理のプログラム群をv1.01と想定して解説を

Table 4. The structure of directories to generate land surface data sets for SiBUC.

Directories on \$(path)/Data/		Operations	Process
data/		To generate link for global data sets	2.1
Africa_1deg/	include/	To define the target region with editing " <u>define.in</u> "	2.2
	lib/	To compile library with " <u>make all</u> "	2.3
	src/	To generate the data sets with "make all" and "paraset.sh"	2.4
	out_basic/	Output directory	
	FIGrads	To visualize output file on out_basic using Grads	2.5
	foreing	To generate forcing data with "script_forcing.csh" after	26
	Torcing	editing " <u>define force.in</u> "	2.0

進める.開発者らによるSiBUCの開発はまだ途上で あり、今後もソースコードの改良・修正が予想され る.大幅な改定があった場合は、極力その都度マニ ュアルを改訂していく予定である.

1.7 データ・プログラムの提供について

本資料を執筆している現在,SiBUCはオープンソ ースとはなっていない.しかし,SiBUCを用いた計 算に興味がある場合は,まずは開発者らに連絡して 頂きたい.使用目的に応じた適切な提供方法を個別 に相談したいと考えている.

SiBUCの前処理で作成される地表面物理パラメー タ・気象強制力データや、SiBUCのoutputファイルの 提供を望む場合も著者らに連絡して頂きたい. これ までも、そういった形での研究協力は行ってきてお り、基本的に問題なくデータ提供できると考える.

以上,第1章が長くなったが,第2章以降では具体 的な作業内容について説明する.

2. 地表面データの作成

第2章では、領域定義ファイル("define.in")を読み込 むプログラム群による、地表面データの作成方法を 説明する.第2章で説明するデータセットは、Table 4 に示されるディレクトリ上のコマンド実行スクリプ トにより作成される.以後、手順に従って実行方法 を説明する.なお、本章のコピーデータ元には、京 都大学防災研究所・水資源センターのデータサーバ ー・nas027(通称lake)上での作業を想定して書かれて いる事に留意願いたい.

2.1 ディレクトリの作成とリンク作成

SiBUCを用いたいディレクトリ上にDataディレク トリを作成し、最新の地表面データ自動作成ディレ クトリをコピーする.具体的には、\$(path/)上に於い て、[Process 2.1]のコマンドを実行する(Table 5).青 字のディレクトリ名は、ユーザーが自由に設定でき るが、領域・解像度情報を記載する事が望ましい. \$(Dat_dir)/は入力データ作成のプログラム群を更新 しているディレクトリである. DATEはアーカイブさ れた日時であり,最新の日時を選択すると良い.

Table 5. [Process 2.1] on \$(path)/
\$ mkdir Data
\$ cd Data
\$ ln -fs \$(Dat_dir)/data/ ./data/
\$ cp -r \$(Dat_dir)/XXMIN_LSPv1.1_DATE/
./Africa_1deg

2.2 領域定義ファイルの修正

領域は、 \$(path)/Data/Africa_1deg/include/に格納さ れている、"define.in"で定義する. Emacs等のエディ タで、"define.in"を対象に応じて修正する. [Process 2.2]中の赤字について、以下の順に修正する(Table 6).

- [1] 対象領域によって、領域を定義する.
- [2] モデルの解像度を決定する. 解像度(resl)を決定 すれば,モデルの格子数(mx,my)は計算により算 出できる. 例えば,経度方向であれば,mxとresl の積が(xmax-xmin)に一致するようにmxを決定す れば良い.特に解像度について制約はないが,高 解像度になるほど,SiBUCの解析時間が膨大にな る.著者の考えとしては,モデルの総格子数は 10000以下になるのが望ましい. これまでの研究 では,全球スケールでは0.25~1.0°,大陸河川ス ケールでは0.05~0.2°程度でモデル計算が実行さ れてきた.
- [3] ファイル名と解像度を定義する.以下の陸面パラ メータの作成ファイルやSiBUCのoutputファイル には、ここで定義したファイル名が用いられる. なお、cname, creslの文字数も修正することに留意 されたい.

2.3 ライブラリのコンパイル

地表面パラメータ作成に用いるライブラリをコン パイルするため, \$(path)/Data/Africa_1deg/lib/上で [Process 2.3]のコマンドを実行する(Table 7).



```
Table 7 [Process 2.3]
on $(path)/ Data/Africa_1deg/lib/
$ make clean
```

```
$ make all
```

2.4 地表面物理データの作成

地表面パラメータ作成スクリプトを実行するため, \$(path)/Data/Africa_1deg/src/上で[Process 2.4]のコマ ンドを実行する(Table 8). 領域とマシン環境にもよ るが, このプロセスには半日程度の計算時間を要す る.

Table 8 [Process 2.4]
on \$(path)/ Data/Africa_1deg/src/
\$ make clean
\$ make all
\$./paraset.sh > log.paraset &
\$tail –f log.paraset

2.5 Gradsを用いた地表面パラメータの作画

\$(path)/Data/Africa_1deg/FIGrads/上で, Gradsスクリ プトを実行することで, 作成したデータを作画する. 全ての作画スクリプトは, "p_target.gs", "p_project.gs", "p_header.gs"をその内部で実行させる. "p_target.gs" は作画領域を定義する. "p_project.gs"は作画スタイ ルを定義する(shadedかgrfill, mapの高解像度化等). "p_header.gs"は, Grads上での作画範囲を定義する. それらの微調整をした後, [Process 2.5]のコマンドを 実行することで,作成した地表面パラメータのGIF ファイルを作成できる(Table 9).

```
Table 9 [Process 2.5] on $(path)/
Data/Africa_1deg/FIGrads/
$ grads
$ yes
ga> drawall.gs
```

2.6 気象強制力データの作成

\$(path)/Data/Africa_1deg/forcing/上のスクリプト, "script_forcing.csh"を実行し, [Precess 2.6-1]により気 象強制力データを作成する(Table 10).

Table 10 [Process 2.6-1]

on \$(path)/ Data/Africa_1deg/forcing/ \$./script_forcing.csh > log.forcing & \$ tail -f log.forcing

このスクリプトにより実行されるプログラムは, \$(path)/Data/Africa_1deg/forcing/define_force.inをイン クルードファイルとして読み取り,実行する. [Precess 2.6-2]にはこのインクルードファイルの内容 を記載しているが,重要な点は解析期間を決定する ことと,利用する降水量データを選択することであ る(Table 11).勿論,複数の降水量データを作成して SiBUCにより解析することも出来る.

"script_forcing.csh"を実行する前に, [Precess 2.4]

Table 11 [Process 2.6-2] To edit \$(path)/ Data/Africa_1deg/forcing/define_force.in

の"paraset.sh"が完了されてなければならないことに 留意されたい.気温や大気圧など,標高依存する気 象強制力を内挿する際には,"paraset.sh"により作成 される標高データを要する為である.

2.7 本章で用いたデータ

本章では、全球の陸面データから作成した対象領 域の陸面パラメータを作成する手順を説明した.重 要なのは、"\$(path)/Data/Africa_1deg/src/paraset.sh"で 実行される、4つのプログラムである.それぞれのプ ログラムの実行内容と解析順序はTable 12に示され る.また、本章で使用された地表面データについて はTable 13にまとめた.入力データの作成アルゴリズ ムv1.1では、Table 13にまとめたデータを用いている が、今後も世界で発信される地表面データの情報を キャッチアップしつつ、更新・改良を行っていく予 定である.本資料の作成時に於いても、全球湖沼・ 湿地地図(Global lake and Wetland Datasets: GLWD; Lehner and Doll, 2004)のデータを入力データとして 取り組むべく,作業を行っている.

本章に用いた気象強制力データについて,降水量 データについてはTabal 14に,Hirabayashi et al. (2008)より用いたデータについてはTabal 15に, JRA25より用いたデータについてはTabal 16にまと めた.降水量データのうち,APHRODITEについては, データの得られないユーラシア大陸域以外では GPCCの降水量を用いて降水量データを作成してい る.

2.8 本章で作成したデータ

本章で作成されたデータのうち,第3章で述べる SiBUCの解析に於いて用いられるデータについて説 明を加える.

(1) 地表面パラメータ

作成された地表面パラメータのうち, Table 17に示 されるデータがSiBUCの解析に用いられる.現在の SiBUCv1.01はTable 18に示されるように19種類の土 地被覆を扱っている. その中で, 灌漑農地は

Table 12. The purpose of programs processed in "./paraset.sh"

\$(path)/Data/Africa_1deg/src	Purpose	Order
landmask.f	To generate land masking data (whole lands) using GLCC v2	1
classfmake.f	To generate class fraction (land use) data using GLCC v2 and MIRCA 2000	2
soilmake.f	To generate soil physical and agricultural parameters using satellite NDVI, GTOPO30 and ECOCLIMAP	

Table 13. The global land surface data sets processed in "./paraset.sh"

Name	Data	Spatial Resolution	Provided by
GLCC v2	Global land cover	$30 \text{sec} \approx 1 \text{km}$	U. S. Geological Survey
GTOPO30	Global elevation	$30 \sec \approx 1 \text{km}$	U. S. Geological Survey
MIRCA2000	Global irrigation and crop map	5min ≒ 10km	Portmann et al. (2010)
NDVI	10 day composite NDVI	1km	Spot-Vegetation
ECOCLIMAP	Global soil and vegetation parameters	$30 \text{sec} \doteq 1 \text{km}$	Meteo-France

Table 14. The precipitation data sets processed in "./script_forcing.csh"

		2	. –	-		
Name	Period	Area	Time resl.	Spatial resl.	Produced by	Reference
GPCC_v6	1901-	Global	monthly	0.5 deg.	Observation	Rudolf et al. (2010)
GPCP_1DD_v1.2	1997-	Global	daily	1.0 deg.	Obs. and satellite	Huffman et al. (2013)
APHRODITE v1101	1951-	Eurasia	daily	0.25 deg.	Observation	Yatagai et al. (2012)
GSMaP_MWR_v4.8.4	1998-	Global	hourly	0.25 deg.	Satelite	Ushio et al. (2009)

Table 15. The meteorological data sets provided by Hirabayashi et al. (2008) processed in "./script_forcing.csh"

Meteorological forcing	Unit	Time resl.	Area	Spatial resl.	Period
Short wave radiation	W/m ²	daily			
Long wave radiation	W/m^2	3 hourly	Clabal	0.5.1	1051
Specific humidity	kg/kg	g daily Global		0.5 deg.	1951-
Surface temperature	К	3 hourly			

Table 16. The meteorological data sets provided by JRA25 (Onogi et al., 2007) processed in "./script_forcing.csh"

Meteorological forcing	Unit	Time resl.	Area	Spatial resl.	Period	
Atmospheric pressure	Ра					
Wind speed	m/s	(h angles	Global	1.25 deg.	1070	
Specific humidity	kg/kg	6 nourly			1979-	
Surface temperature	K					

Table 17. The generated data sets which are used in simulation in SiBUC. "**" is determined by cname and cresl which are defined in "define.in".

\$(path)/Data/Africa_1deg/out_basic/	Data	Dimension	
AREA_**.bin	Area of each grid (km ²)	mx · my	
ClassFrac_**_MIRCA-GLCC.bin	Class fraction data for 19 land cover type	mx · my · 19	
cropstage_**.bin	Crop stage data for irrigated cropland	mx · my · 36	
Mask_**.bin	Land masking data	mx∙my	
Nc_**.bin	Vegetation fraction	mx · my · 15*36	
Soil_**.bin	Soil physical parameters	mx · my · 11	
SPOTLAI_**.bin	LAI (leaf area index) generated by NDVI (m^2/m^2)	mx · my · 15 · 36	
Vc_**.bin	Greeness fraction	mx · my · 15 · 36	

MIRCA2000のデータを用いて7作物に分類されて扱 われている.一方,LAI("SPOTLAI_**.bin")や, vegetation fraction ("Nc_**.bin"), greeness fraction ("Vc_**.bin")の植生パラメータは,作物種を問わず 灌漑農地として一種類作成されるのみである.植生 パラメータは,ECOCLIMAPを用いて1kmデータから 作成するものの,現在1km解像度で作物分類情報を 提供するデータが存在しない.そのため,SiBUCの 解析では,全ての灌漑作物に同じ植生パラメータが 与えられている.なお,**は"define.in"で定義した, 領域名(cname)と解像度(cresl)で決定される.

SiBUCで用いられる土壌物理パラメータはTable 19に示される.標高・勾配のデータはGTOPO30より, それ以外のデータについてはECOCLIMAPから作成 されている.

灌漑農地の農事暦データ("cropstage **.bin")は, 衛

星NDVIを用いた時系列解析により作成される.詳しい作成方法については,小槻ら(2012)に詳しく述べられている.

作成された地表面パラメータの作画ファイルの例 をFig.4に示す. Fig.4a-1, 4a-2はそれぞれ, grassland と総灌漑農地被覆率の全球分布を示している. Fig.4b-1, 4b-2はそれぞれ, 土壌深さと間隙率の全球 分布を示している. Fig.4c-1, 4c-2はそれぞれ, 1月1 日と7月1日における灌漑農地の作物生育ステージの 全球分布を示している. Fig.4では, 作成されたデー タを全球分布情報として紹介したが, "\$(path)/Data/FIGrads/draw_all.gs"を実行した際には, "\$(path)/Data/include/define.in"で定義された領域の作 画ファイルが取得できる.

	Data
1.	Urban Canopy
2.	Water Body
3.	Broadleaf-evergreen trees
4.	Broadleaf-deciduous trees
5.	Broadleaf and needle leaf trees
6.	Needleleaf-coniferous trees
7.	Needleleaf-deciduous trees
8.	Short vegetation/c4 grassland
9.	Broadleaf shrubs with bare soil
10.	Dwarf trees and shrubs
11.	Farmland (non-irrigated)
12.	Paddy field (non-irrigation)
13.	Paddy field (irrigated)
14.	Spring Wheat (irrigated)
15,	Winter Wheat (irrigated)
16.	Corn (irrigated)
17.	Soybean (irrigated)
18.	Cotton (irrigated)
19.	Other crops (irrigated)
(20)	To be added

Table 18. The generated class fraction data used in SiBUC simulation. 19 land cover type is included, currently.

(2) 気象強制力データ

気象強制力は、SiBUCの解析に必要となる7要素 (降水・気温・短波放射・長波放射・比湿・大気圧・ 風速)が作成される.その中でも,陸面過程解析に大 きな影響を与える降水データについて説明を加える. 降水データは、Table 14に示されたように、 GPCC v6, GPCP 1DD v1.2, GSMaP MWR v4.8.4, APHRODITE v1101の4プロダクトが利用可能である. GPCCとAPHRODITEは地上観測降水量から空間内挿 により作成されたプロダクトである. GSMaPは, 衛 星観測情報から作成されたプロダクトである. GPCP は衛星観測降水量を地上観測降水量で補正したプロ ダクトである. 各降水プロダクトの年平均降水量の 全球分布をFig.5に示す.最も大きな違いは、衛星観 測情報を用いているGSMaPとGPCPは海上でもデー タを得られる点である.陸上に於いては、大気場が 収束しする,降水量の多い地域では,各降水プロダ クトが同じ傾向を示している.しかし, Fig. 6に示す ように各地域で見た時、各降水量プロダクトの違い が明らかになる. 例えば, GPCCをAPHRODITEは共 に観測降水量を基にして作成されたプロダクトであ るが、東南アジア域の多い所では250mm/year以上の 違いが出ている(Fig.6a-1). 各プロダクトの良し悪し を議論する事は難しいが、ユーザーとして各降水量

プロダクトが不確実性を有している事を理解する必 要がある.

降水量プロダクトの不確実性が流出解析に与える 影響を論じたFekete et al. (2004)は,以下の様に指摘 している.

- 一降水量がポテンシャル蒸発散量を上回る湿潤域では、降水量の差はほぼ等しく流出量の差として反映される。流出量は降水量と比較してその量自体が少ないため、相対的により顕著な差となる。
- 一流出プロセスが強い非線形性を持つ半乾燥域では、 降水量の差は、流出する量としては湿潤域に比し て小さい値として反映される.しかし、流出プロ セスの非線形性により、相対的には湿潤域よりも 大きい流出の差が発生する.
- -水収支解析によってほとんど流出が発生しない乾燥域では、降水量の差は流出量の差としては反映されない。多少の降水量の差は、単に蒸発散量の増加・減少として吸収される。

Fekete et al. (2004)の指摘する様に,湿潤域に位置 する東南アジアでは,降水量の違いは蒸発散量に於 きな影響を与えず(Fig. 6b-1, 6b-2),流出量の違いと して反映されることが分かる(Fig. 6c-1, 6c-2). そのた め,降水量としての差が小さい場合でも(例えば10% 程度),流出量としてはより大きな差として解析さ れることに注意する必要がある.この傾向は,流出 率の小さな流域ほど顕著になる.

3. SiBUCによる解析手順

本章では、第2章で作成した地表面データを用いて、 SiBUCにより解析する手順を説明する. なお、3.1節 では京都大学防災研究所・水資源センターのデータ サーバー、nas027を想定したコマンドとなる. 外部 環境のユーザーに対しては、第2章の全プロセス、及 び[process 3.1]を行った後の環境が提供されると想 定されるので、[process 3.2]以後を読み進めて頂いて 問題ない.

3.1 最新のSiBUCディレクトリのコピー

最新のSiBUCバージョンを, [Process 3.1]のコマン ドを実行する事でコピーする(Table 20). DATEは SiBUCのディレクトリがアーカイブされた日付を. 意味する.青字のディレクトリ名は,ユーザーが自 由に設定できるが,領域・解像度・SiBUCのバージ ョン情報を記載する事が望ましい.



Fig.4. Several example figures generated by Grads. Figures (a-1) and (a-2) show class fraction data for grassland and all irrigated cropland, respectively. Figures (b-1) and (b-2) show total soil depth and porosity, respectively. Figures (c-1) and (c-1) show growing stages of irrigated cropland on January 1 and July 1, respectively.

Table 19. The generated soil physical data sets used in SiBUC simulation.

	Data
1.	root depth (m)
2.	soil depth (m)
3.	clay fraction of soil texture
4.	sand fraction of soil texture
5.	porosity
6.	wilting point
7.	field capacity
8.	B power of Clapp Hornberger
9.	soil type
10.	Topography (m)
11.	Slope (m/m)

Table 20. [Process 3.1] on \$(path)/			
\$ cp -r \$(SiBUC_dir)//XXX_SiBUCv1.01_DATE			
./SiBUC_Africa1deg_v1.01			

3.2 ライブラリのコンパイル

SiBUCのライブラリをコンパイルするため, \$(path)/SiBUC_Africa1deg_v1.01/lib/上のディレクト リで [Process 3.2]のコマンドを実行する(Table 21).



Fig.5. Mean annual precipitation of (a) GPCC, (b) GPCP, (c) APHRODITE, and (e) GSMaP from 1998 to 2004.



Fig 6. Difference in mean annual precipitation (a-1, a-2, a-3), simulated evapotranspiration (b-1, b-2, b-3), and simulated runoff (c-1, c-2, c-3) from 1998 to 2006. Units of every figure are mm·yr-1. The results using APHRODITE minus that of GPCC are shown in a-1, b1, and c-1. The results using GPCC minus that of GPCC are shown in a-2, b-2, and c-2. The results using GSMaP minus that of GPCC are shown in a-3, b-3, and c-3. Cold color means precipitation, evapotranspiration, and runoff using GPCC are higher than other precipitation products.

Table 21. [Process 3.2]
on \$(path)/SiBUC_Africa1deg_v1.01/
\$ cd ./lib/sibuc/
\$ make clean
\$ make all
\$ cd/ssl2/
\$ make clean
\$ make all
\$ cd/ssl2/ \$ make clean \$ make all

3.3 解析設定・オプションの設定

解析設定・オプションは, "define_input.in", "OPTION_OUTPUT.in", "OPTION_SIMULATE.in"の3 つのファイルによって定義される. これらのファイ ルは, "\$(path)/SiBUC_Africa1deg_v1.01/src/"にある. 解析・オプション設定のうち, 重要な点に説明を加 える.

地表面データ作成に使用した"define.in"は、ここで も共有され使用される. "define.in"へのpathや、入力 とする気象強制力は、"OPTION_SIMULATE.in"で定 義される(Table 22). 開発者らの一般的な解析では、 気温・長波放射・短波放射・比湿にはHirabayashi et al.(2008)データを使用し、大気圧・風速データには JRA25を用いている. 降水量データについては、ど のプロダクトが良いかといった判断が難しいため、 使用者の側で複数のデータを用いて実験することが 好ましいと考えている.

解析の出力要素は、"OPTION_OUTPUT.in"で定義

される.しかし,SiBUCを単独で利用する限りにおいては、このファイルを修正する必要はない.この オプションファイルは、将来的に河川・貯水池・作 物成長モデルとオンライン結合することを想定し、 その際の膨大なアウトプットを管理するために準備 している.

解析期間・スピンナップ・結合モデルのオプショ ンは、"OPTION_SIMUKATE.in"で定義される(Table 23). スピンナップ期間は一般的に3年以上が望まし いが、乾燥域ではそれ以上のスピンナップが必要と の指摘もある.SiBUCは各年度の最終日・最終ステ ップでRESTART計算の為の状態量ファイルを出力 する.スピンアップ期間を0とした場合は、解析初年 の状態量から解析を再開することが出来る.結合モ デルオプションについては、今後のオンライン結合 によって選択肢が増える予定である.現在は、灌漑 モデル結合の有無のみ指示できる.

3.4 SiBUC計算の実行

解析設定・オプションを修正した上で, [Process 3.5]のコマンドを実行してコンパイルし,計算を実行 する(Table 24). SiBUC の解析結果は, \$(path)/SiBUC Africa1deg v1.01/output/に出力される.

Table 24. [Process 3.5]	
on \$(path)/SiBUC_Africa1deg_v1.01/src/	
\$ make clean	
\$ make all	
\$./sibuc.exe > log.simtest &	
\$ tail –f log.simtest	



4. 計算結果の処理

本章では,第3章の解析により出力されたファイル の代表的な処理方法を説明する.

4.1 気候値解析と作画

SiBUCにより解析された,複数年の日アウトプットは, [Process 4.1]のコマンドを実行することで解析 期間の気候値として月毎に算出される(Table 25).気候値を算出する期間は, "monanal.f"のヘッダー部分で定義されている.

Table 25. [Process 4.1]

on \$(path)/SiBUC_Africa1deg_v1.01/output/ \$ ifort monanal.f -o monanal

\$./monanal

算出した気候値を作画する為, Gradsのスクリプト を準備している. [Process 4.2]のコマンドを実行する 事で,SiBUCの出力ファイルを作画できる(Table 26). コントロールファイルについては, "monanal.f"中で 自動作成されるため,ユーザー自身で準備する必要 はない.

Table 26. [Process 4.2]
on \$(path)/SiBUC_Africa1deg_v1.01/output/
\$ cd ./clim/
\$ grads
\$ yes
ga> sibuc_project.gs

"sibuc_project.gs"がSiBUC解析気候値を作画する スクリプトとなる.なお,[Process 2.5]と同様に, "p_target.gs", "p_project.gs", "p_header.gsを作画領域 に合わせて修正する必要がある.また,提供段階の デフォルトでは, "sibuc_project.gs"は年平均・積算値 のみを作画するように設定されている. "sibuc_project.gs"中の,月のループを1月から12月に



Fig.7 Sample figures of twenty-five variables simulated by SiBUC over the entire African Continent.

	Name	Variables	Unit
1.	Swnet	Net short-wave radiation	W/m^2
2.	Lwnet	Net long wave radiation	W/m^2
3.	Qle	Latent heat flux	W/m^2
4.	Qh	Sensible heat flux	W/m^2
5.	Qg	Ground heat flux	W/m^2
6.	Snowf	Snowfall	mm/m ²
7.	Rainf	Rainfall	mm/m ²
8.	Evap	Evapotranspiration	mm/m ²
9.	Roff	Total runoff (= surface runoff + base runoff)	mm/m ²
10.	Qsb	Base runoff	mm/m ²
11.	RadT	Radiative temperature	Κ
12.	Albe	Albedo	-
13.	SWE	Snow water equivalent	mm/m ²
14.	Surfs	Surface storage	mm/m ²
15,	SM1	Soil moisture of the 1st layer	-
16.	SM2	Soil moisture of the 2nd layer	-
17.	SM3	Soil moisture of the 3rd layer	-
18.	ST1	Soil temperature of the 1st layer	Κ
19.	ST2	Soil temperature of the 2nd layer	Κ
20.	RTmax	Maximum radiative temperature	Κ
21.	RTmin	Minimum radiative temperature	Κ
22.	Win	Irrigation water requirement (\neq withdrawn water)	mm/m ²
23.	Wout	Drained water from irrigated cropland	mm/m ²
24.	WR	Water resources = Rainfall + Snowfall – evapotranspiration	mm/m ²
25.	Rrate	Runoff rate = Total runoff / (Rainfall + Snowfall)	-

Table 27. Twenty-five visualized variables with "project_sibuc.gs"

することで,各月ごとの変数も作画することが出来 る.このスクリプトにより作画される変数は,Table 27にまとめられる.1-23番の変数は,SiBUCから出力 された変数である.24,25番目の変数(WR,Rrate) はSiBUCの出力値から"sibuc_project.gs"中で計算し たものである.なお,降水量・蒸発散量等の単位は, SiBUCはkg/m²/sで出力しているが,スクリプト中で 86400を乗じてkg/m² (mm/m²)として作画している. アフリカ大陸全域に於いて"sibuc_project.gs"で作画 した25変数をFig.7に示す.Fig.7に示される作画ファ イルは、デフォルト設定で作画したファイルであり, "sibuc_project.gs"中のclevs, cclos等の範囲・値を変更 することで,色合いや作画内のレジェンドについて 変更することが可能である.

4.2 水収支解析

SiBUCの出力ファイルからの水収支解析の方法に ついて説明する.本節での水収支解析は,或る領域 の水収支を計算する(Fig.8). [Process 4.3]のコマンド を実行する事で,SiBUCの出力ファイルからのミス 収支解析を実行できる(Table 28).

Table 28. [Process 4.3]	
on \$(path)/SiBUC_Africa1deg_v1.01/output/	
\$ cd ./wbcheck/	
\$./both_ym.csh	

このスクリプトにより、年毎、及び、月毎の水収 支解析が実行できる.計算結果は、 $(path)/SiBUC_Africaldeg_v1.01/output/wbcheck/gnu/$ に4つのアスキーファイルとして出力される "wb**_anual.txt"と"wbAfricaldeg_month.txt"はGt単位 で、"mm_wb**_anual.txt"、"mm_wbAfricaldeg_month. txt"はmm単位で出力される.ここで、**は"define.in" で定義した、領域名(cname)と解像度(cresl)で決定される.出力ファイルには、年情報の後(月出力のフ ァイルには、年・月・1900年からの積算月情報の後) に、以下の情報が記録されている.

[1] WB: 水収支

[2] Prec: 降水量

[3] Evap: 蒸発散量



Fig.9 Annual runoff from 1979 to 2006 in the upper basin stations at (a) Nakhon Sawan in the Chao Phraya River, (b) Mukdahan in the Mekong River and (c) Sagaing in the Irrawaddy River. Black bars, blue lines, purple lines, red lines, green lines, and orange lines represent observed river discharge, simulated runoff using GPCC, GPCP, observed precipitation (K12), APHRODITE, and GSMaP_MWR, respectively.



Fig.8 Schematic image of water balance analysis over certain catchments.

- [4] Roff: 流出量
- [5] TWS: 地表面貯水量 (total water storage)
- [6] ΔTWD: 地表面貯水量変化

単位はいずれも,領域積算値(Gt),若しくは,領域 平均値(mm)である.なお,各メッシュの*Roff*及び*WB* は以下の式で計算される.

$$Roff_i = Qs_i + Qsb_i \tag{1}$$

$$WB_i = Prec_i + Win_i - Evap_i - Wout_i - \Delta TWS_i$$
 (2)

ここで,各変数の意味はTable 27と同様である.地表 面貯水量(TWS)は,土壌水分量や地表・植生遮断量, 湿地・水田などの地表滞水量の総和である.

積算・平均する領域には、デフォルトで[Process 2.4]で作成された、解析領域を使用している.ユーザ ー自身で対象とする流量観測点の集水域マスクを作 成すれば、[Process 4.3]で処理されるプログラムの読 み込みマスクデータと入れ替えることで、Roffは観測 流量と比較することが出来る.例えば,Fig.9は東南 アジアの3河川で,異なる降水量プロダクトを用いて 解析された流出量と,観測流量を比較したものであ る.本節で説明した水収支解析の最も一般的な応用 は,Fig.9の様に,SiBUCで計算された流出量を観測 河川流量と比較することである.

5. 結語

本資料では、SiBUC Manual利用編ver1.0として、 SiBUCを利用する為の方法について解説した.計算 に要する地表面パラメータや気象強制力を全球陸面 データから作成する手順、入力データを用いた SiBUCの解析手順、SiBUC出力の代表的な処理方法 を説明した.

本資料で説明した内容は、多くのプログラム群と それを実行するスクリプトにより実行される.プロ グラム群を全て読み込み、理解する必要は無いが、 本資料から大まかな流れを理解して頂ければ幸いで ある.本資料が、今後新たにSiBUCを利用し始める ユーザーの助けとなり、彼らの研究成果がいつの日 か社会に還元されることを祈念しつつ、本資料の結 語とする.

謝 辞

SiBUCは、これまでの多くの先輩諸兄の改良・修 正・知見により現在に至っている.これまで開発に 関わってこられた全ての方々に、深く感謝する.

参考文献

安倍雅宏・田中賢治・小尻利治・浜口俊雄(2012): ナ イル川流域における多国間水資源開発コンフリク トに関する研究,京都大学防災研究所年報,第55号 B, pp.579-591.

浅野倫矢(2013): 大規模貯水池操作モデルによるナ

イル川流域の流出再現性の向上,京都大学工学部 地球工学科 卒業論文.

- 藤井嵩大・田中賢治・相馬一義・小尻利治(2011):都 市気象を表現する力学的ダウンスケーリングに関 する研究,水工学論文集,第55巻,pp.355-360.
- 小槻峻司・田中賢治(2013a): 陸面過程モデルと大気 水収支法による灌漑農地からの水蒸気供給量推定. 土木学会論文集B1,Vol:69,pp.1801-1806.
- 小槻峻司・田中賢治・小尻利治(2013b): 気候変動が 日本の水資源に与える影響推計 (I) -日本全域水源 モデルの開発-,水文・水資源学会誌, Vol:26, pp.133-142.
- 小槻峻司・田中賢治・小尻利治(2013c): 気候変動が 日本の水資源に与える影響推計(II)-水需給・米生 産変化とその適応策-,水文・水資源学会誌, Vol:26, pp.143-152.
- 小槻峻司・田中賢治・小尻利治(2013d):多様な作物 分布を考慮した全球農業水需要量推定,環境科学 会誌, Vol:26-2, pp.158-166.
- 小槻峻司・田中賢治・小尻利治・浜口俊雄(2012):衛 星データから作成した農事暦を活用した全球陸域 水循環解析,水文・水資源学会誌, Vol:25, pp.373-388.
- 小槻峻司・田中賢治・小尻利治・浜口俊雄(2011): 灌 漑を考慮した陸域水循環モデルの構築,水工学論 文集,第55巻, pp.553-558.
- 甲山治・田中賢治・池淵周一(2004):中国淮河流域 における農業形態の推定と陸面過程モデルへの適 用,土木学会水工学論文集,第48巻,pp.211-216.
- 相馬一義・田中賢治・池淵周一(2006): 現業気象デー タと陸面過程モデルによる日本の地表面状態量の 推定,京都大学防災研究所年報,第49号 B, pp.617-624.
- 相馬一義・田中賢治・中北英一・池淵周一(2004): 非 静力数値気象モデルへの詳細な陸面過程モデルの 導入,土木学会水工学論文集,第48巻, pp.127-132.
- 相馬一義・田中賢治・末次忠司・坪木和久・篠田太 郎・榊原篤志・長谷川晃一・茂木耕作・中北英一 (2013):現実的な地表面状態量初期値が2008年に東 京都で発生した局地的大雨へ与える影響,土木学 会論文集B1(水工学),Vol.69,I_343-I_348.
- 田中賢治・石岡賢治・中北英一・池淵周一(2001a):水田、湖面における熱収支の季節変化-琵琶湖プロジェクトより-,京都大学防災研究所年報,第44号B-2, pp.427-443.
- 田中賢治・中村忠則・椎葉充晴・池淵周一(2001b):地 表面温度情報とKalman Filterを用いた土壌水分デー タ同化,土木学会水工学論文集,第45巻,pp.271-276. 田中賢治・中村忠則・椎葉充晴・池淵周一(2000):陸

面過程モデルにおける土壌水分量の役割,土木学 会水工学論文集,第44巻,pp.157-162.

- 田中賢治・中村忠則・山本卓生・椎葉充晴・池淵周 -(1998): SiBUC-JSM88結合モデルのテストラン, 京都大学防災研究所年報, 第41号B-2, pp.135-154.
- 崎嘉哉・田中賢治・小尻利治・浜口俊雄(2011):灌 漑地の拡大の影響を考慮したアラル海流域におけ る水・熱収支の経年変化の再現,土木学会水工学論 文集,第55巻,pp.391-396.
- 峠嘉哉・田中賢治・小尻利治・浜口俊雄 (2013):集 水域の灌漑地拡大の影響を考慮した水・熱収支解析 によるアラル海の経年的縮小の再現,環境科学会 誌, Vol26-2, pp180-190.
- 崎嘉哉・田中賢治・中北英一・小尻利治(2012):陸面 解析による灌漑取水とアラル海の消長に関する応 答分析~アラル海流域の持続可能性向上へ向けて ~、土木学会論文集G(環境), Vol.68-5, pp.1147-1152.
- 濱邉良・田中賢治・池淵周一(2003): 夏季チベット高 原における陸面過程モデルSiBUCの性能評価, 水
- 文・水資源学会2003年研究発表会要旨集, pp.68-69. 萬和明・キムスンミン・立川康人・椎葉充晴・松宮 謙治(2011):データ同化を用いた陸面過程モデル における土壌パラメータ推定方法, 2011年土壌水分 ワークショップ論文集, pp.4.1-4.4.
- 萬和明・藤園順哉・立川康人・椎葉充晴(2010): 地表面水文過程に基づいた作物生長モデルの構築, 京都大学防災研究所年報,第53号B, pp.507-513.
- 萬和明・田中賢治・池淵周一(2006):全球灌漑要求水 量と降水量の相関分析,水工学論文集第50巻, pp.535-540.
- 萬和明・田中賢治・中北英一(2009):水収支に基づく 土壌水分推定値の精度評価,水工学論文集第53巻, pp.403-40.
- Boone A. and Coauthors (2004): The Rhone-aggregation land surface sheme intercomparison project: an overview, *Journal of climate*, Vol:17-1, pp.187-208.
- Fekete B. M. and Vorosmarty C. J. (2004): Uncertainties in precipitation and their impacts on runoff estimates, *Journal of Climate*, Vol.17, pp.294-304.
- Hirabayashi Y., Kanae S., Motoya K., Masuda K. and Doll P. (2008): A 59-year (1948-2006) global near-surface meteorological data set for land surface models, *Hydrological Research Letters*, Vol.2, pp.36-40.
- Huffman G. J. and Bolvin D. T. (2013): Version 1.2 GPCP One-Degree Daily Precipitation Data Set Documentation. (http://precip.gsfc.nasa.gov, Last access Mar 20, 2013)
- Kotsuki A. and Kenji T. (2013a): Comparative study of

precipitation products through a hydrological land surface analysis in Southeast Asian basins, Thailand, *Hydrological Research Letters*. (in revision)

- Kotsuki A. and Kenji T. (2013b): Estimation of Climate Change Impact on Japanese Rice Yield and Water Resources, *Proceedings of 2013 IAHR World Congress*. (in press)
- Kotsuki A. and Kenji T. (2013c): Impacts of Mid-Rainy Season Rainfall on Runoff into the Chao Phraya River, Thailand, *Journal of Disaster Research*, Vol:8-3. (in press)
- Lehner B. and Doll P. (2004): Development and validation of a global database of lakes, reservoirs and wetlands, *Journal of Hydrology*, Vol.296, pp.1-22.
- Onogi K. and Coauthors (2007): The JRA-25 reanalysis. *Journal of the Meteorological Society of Japan*, Vol.85, pp.369-432.
- Portmann F. T., Siebert S. and Doll P. (2010): MIRCA2000 – global monthly irrigated and rainfed crop areas around the year 2000: a new high-resolution data set for agricultural and hydrological modeling, *Global Biogeochemical Cycles*, Vol.24, pp.1-24.
- Rudolf B., Andreas B., Udo S., Anja M. C. and Markus Z. (2010): GPCC status Report December 2010. (http://gpcc.dwd.de, Last access Mar 20, 2013)
- Rutter N. and Coauthors (2009): Evaluation of forest snow processes models (SnowMIP2). *Journal of Geophysical Research*, Vol.114, pp.1-18.
- Souma K., Sunada K., Suetsugi T. and Tanaka K. (2013): Use of ensemble simulations to evaluate the urban effect on a localized heavy rainfall event in Tokyo, Japan, *Journal of Hydro-environment Research*. (in press)

Souma K., Tanaka K., Nakakita E., Ikebuchi S. and

Takara K.(2008): Effect of the LDAS Derived Realistic Distribution of Soil Moisture on a Summertime Heat Thunderstorm Prediction in Japan, *Proceedings of Water Down Under 2008*, pp.2339-2349, J2.3.

- Tanaka K. 2004. Development of the New Land Surface Scheme SiBUC Commonly Applicable to Basin Water Management and Numerical Weather Prediction Model. Doctoral Dissertation, Graduate School of Engineering, Kyoto University: Kyoto; 289.
- Tanaka K., Fujihara Y., Watanabe T., Kojiri T. and Ikebuchi S. (2006): Projection of the impact of climate change on the surface energy and water balance in the Seyhan River Basin Turkey, *Annual Journal of Hydraulic Engineering*, Vol.50, pp.31-36.
- Tanaka, K., Hayashi H., Nakakita E. and Ikebuchi S. (2001): Energy and Water Budget of Paddy Field in the Lake Biwa Basin, Japan, *Proc. of the International Workshop on GAME-AAN/Radiation*, 2001.
- Tanaka, K., Ishioka K., Nakakita E. and Ikebuchi S. (2003): Energy and water budget in the lake Biwa basin Japan, *Abstract of the IUGG2003*, pp.A114.
- Ushio T. and Coauthors (2009): A Kalman filter approach to the Global Satellite Mapping of Precipitation (GSMaP) from combined passive microwave and infrared radiometric data, *Journal of the Meteorological Society of Japan*, Vol:87A, pp.137-151.
- Yatagai A., Kamiguchi K., Arakawa O., Hamada A., Yasutomi N. and Kitoh A. (2012): APHRODITE: Constructing a Long-term Daily Gridded Precipitation Dataset for Asia based on a Dense Network of Rain Gauges, *Bulletin of American Meteorological Society*, vol.93, pp.1401-1415.

(論文受理日:2013年6月11日)